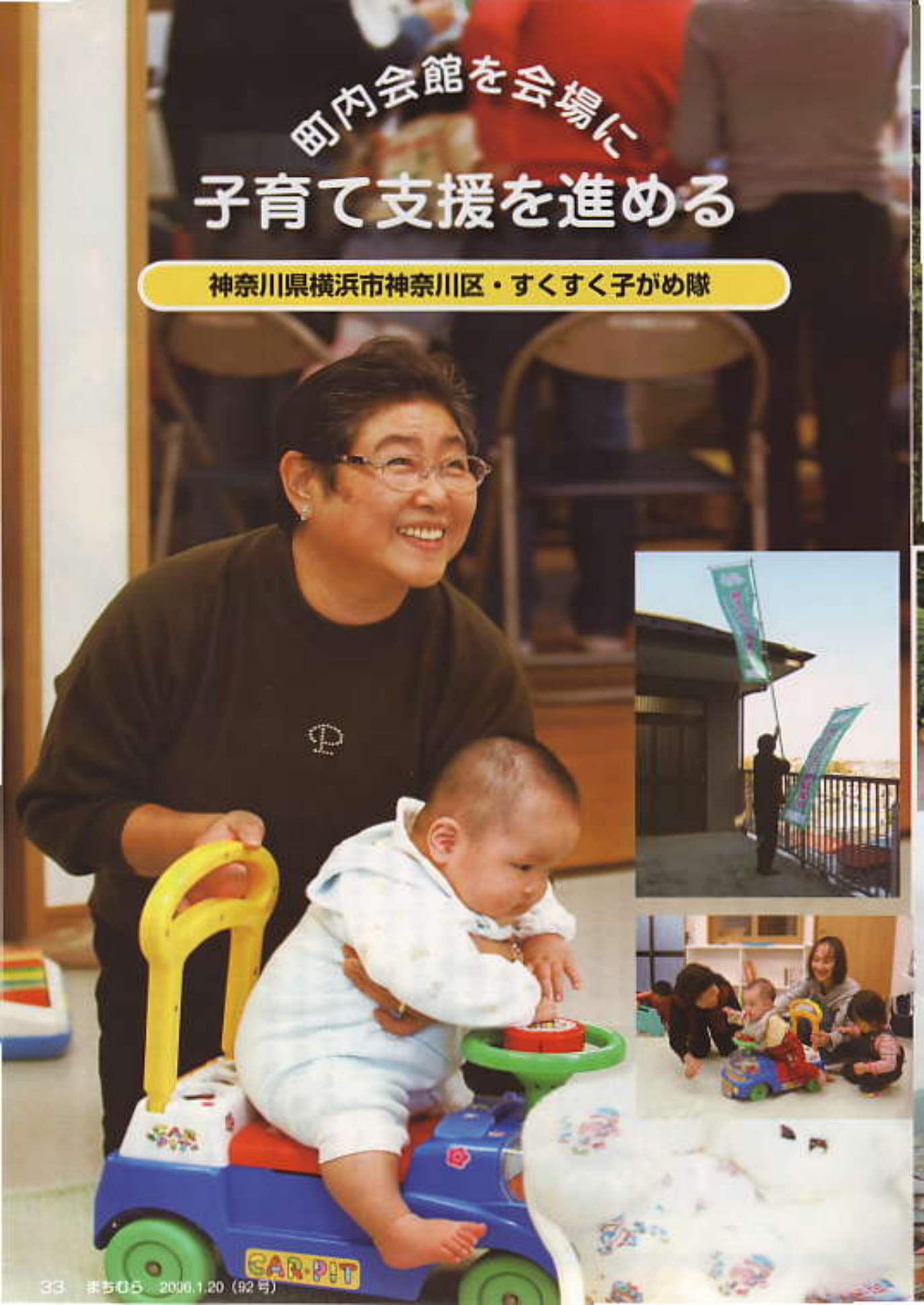
町内会館を会場に

子育て支援を進める

神奈川県横浜市神奈川区・すくすく子がめ隊



「町内会の中に老人会、婦人会、子ども会があって、乳幼児を対象にした組織がないのはおかしいのでは？」。こんな声から連合町内会が中心になって、町内会館で、乳幼児とそのお母さん方を支援する活動が、神奈川区役所と区民が協働して、進められている。そのキーワードは、神奈川区を「子育てが楽しい『まち』にすること」。

二歳二か月の優希ちゃんと生後五か月の陽斗君の姉弟を連れてやってきたお母さん、陽斗君がスタッフの辻村さんに抱っこされている間、お姉ちゃんの優希ちゃんを抱きしめている。いつもは、陽斗君にかかりっきりのお母さんに、このときとばかりと優希ちゃんは甘えているのかも知れない。優希ちゃんたちが参加したのは、横浜市神奈川区松見町二丁目西部町内会館で開かれた「すくすく子がめ隊」による子育て支援の場。この日、少し早いクリスマス会が開かれ、乳幼児とそのお母さん、それにスタッフたち百人近くが集まった。サンタさんは、連合町内会会長の堀江芳雄さんと松見町第四町内会会長の石井康子さんが務め、参加した子ども一人ひとりにお菓

子をプレゼントした。お隣の松見一丁目町内会館でも、先週、クリスマス会が開かれ、同じような光景が繰り広げられた。否、この二か所だけでなく、神奈川区の町内会館を中心に同様の光景が見られたのだろう。クリスマス会だけでなく、月二回あるいは週一回、子どもを乳母車に乗せ、あるいは手を引いて、若いお母さんたちがそれぞれの町内会館にやって来る。待ち受けているのは、スタッフの民生委員、児童委員そしてボランティアの人たち。会館の玄関が開くたび、スタッフが「いらっしゃい」「どうぞ」と必ず声をかける。お母さん方は、顔馴染みさんとあいさつをかわし、雑談にふけったり。コーヒーを呑んだりとゆったりとした時間を過ごす。その間、子どもたちは、スタッフが看ている。そして、時間が来ると、子どもたちは「バイバイ、また来るネ！」と手を振りながら、スタッフに別れを告げ帰っていく。

神奈川区が、子育て関連のグループの代表などをメンバーとして平成十二年度に、区内の子育ての支援策を検討するために立ち上げたのが「親がめ会議」。

育児中のお母さんたちが「ホッ」と寛げる場を提供する活動は、公民館、空き店舗などを会場として数多く展開されるようになってきた。しかし、もっと身近な場があるではないか。町内会館という場が。そう考えた親がめ会議は、連合町内会を主体にした子育て支援を提案した。神奈川区には現在、十八の

連合町内会がある。その連合町内会に対し、その傘下の町内会館を会場に、スタッフには、児童委員、民生委員などになってもらう「すくすく子がめ隊」の設置を呼びかけた。呼びかけの際に、「事故があったら」「会館が汚される」、さらには世代による子育て観の違いから、実施を躊躇する声も一部には聞かれたともいう。そんななか、親がめ会議の代表を努め、ご自身町内会長も務める山根誠さんたちは、冒頭の言葉で説得していった。

呼びかけに応じ、平成十三度に十か所、十四年度にも十か所と設立され、現在ではすべての連合町内会で実施され、その数は二十か所に上っている。その一つ、六つの町内会からなる松見町連合町内会を例に取れば、二か所の町内会館で、それぞれ月二回実施しているが、それぞれ三つの町内会が分担してすすめている。

「子どもたちから元気をもらう」というのは、スタッフが異口同音に発する言葉。「道で会ったら抱っこをせがまれた」とも嬉しそうに言う。「隣は何をする人とぞ」という世相が広がる今、お互いが顔馴染みになることは、地域づくりの原点。すくすく子がめ隊の活動は、単に子育ての域を超え、まちづくりに大きな役割を果たしているといえよう。

■連絡先　横浜市神奈川区　福祉保健センター
サービス課子ども家庭支援担当
TEL　〇四五－四一一－七一一一